

それでモスクワの日本大使館に電話して、エカテリンブルグの日本文化センターの電話番号を知りたいと申し出をしたところ、様々な質問の後にその電話番号を教えてくださいましたので、国際電話を掛けてみたわけです。そうしてら日本人だと分かったとたんに綺麗な標準語で応答してくれたので、こんなシベリアの果てに日本人がいるのかなと思っていたら、その人がロシア人であることが分かり二度驚いた訳です。そして、館長さんの話に及んだ時に、その館長さんがいま6ヶ月間の予定で浦和に滞在していることが分かりました。それで早速浦和を尋ねてその館長さんに会ったわけです。その時いろんな話の中で「何もかも東京・ロシアではなくて、ローカル対ローカルで緊密な交流ができないかと様々な提案をしました。その結果「九州ウラル友好協会」の設立が決まった訳です。そして発足当初はロシアは20名位、日本も20名ほどでスタートしたのです。

Q3、 それではエカテリンブルグでテレビに出演したいきさつとニーナさんとの出会いについてどうぞ。

A3、 ロシアにはその後5回ほど訪問し技術的な問題、それからリサーチなどいろんなことをしました。その中で2度目にエカテリンブルグを訪問したのが2年前でした。で、この時は事前に自分でやりたいことや訪問したい所を計画しスケジュール化して、エカテリンブルグのメンバーに協力を仰ぐというスタイルを取った訳です。

私はもともと時間がつくれたら、ウラル地方まで延々と展開されていた「シベリア抑留の日本人捕虜」のお墓を尋ねたいという希望を持っていました。それで最初のお墓をどのように探そうかと思って、新聞社やテレビ局などメディアを片っ端から当たってみました。幸いあるテレビ局の人が「自分で有力な情報をもっている。但し、同行取材をさせて欲しいというので、了解して一緒に出掛けた訳です。

そして、その日の夜のゴールデンタイムに1回、10時に1回、12時半に1回と合計3回も放映してくれたのです。結果として、その放送を見たニーナさんの友人が連絡してニーナさんは「今、エカテリンブルグに日本人が尋ねてきていること」を知ったのです。しかし、私がそのことを知ったのは2日目の夜でした。

それは、驚いたことにテレビを見た一般の市民からいろんな情報がテレビ局に寄せられてきて、予定を変更して2日目もお墓探しに行くことになったからです。

2日間で合計600キロ位、白樺や唐松の林のなかを探し回りました。そして、夜疲れて帰って来て夕食も済ませてほっと一息入れていた12時頃に、テレビ局から電話があり「ニーナさんという方がぜひあなたに会いたいと言っているがどうされ